

The KH i-Lab Times

今号の「The KH i-Lab Times」より、編集長が変わります。本記事を通じて、読者の皆さんに、少しでもイノベーション戦略部(イノベ部)を身近に感じてもらい、どんな活動をしているか理解してもらえよう努めてまいります!!

特集
1

イノベーション戦略室からイノベーション戦略部へ オープンラボ運用開始と展示スペースのリニューアル



KH i-Lab内にあるオープンラボ。社内外・技術分野を問わず研究を行い、ブレイクスルー技術へ繋がります。

オープンラボ稼働!

KH i-Labに、新しく実験室を立ち上げました。さまざまな実験設備を導入し、社外のメンバーを招き入れ、新規事業のPoC (Proof of Concept・仮説検証)のためのオープンラボとして、運用を始めています。

オープンラボ設備として

バイオ系の実験装置を導入しています。有機化学や遺伝子工学、ケミカルバイオロジーなどの技術分野の異なる研究を、壁を取り払った1つのオープンラボで行っており、研究者同士の異分野交流が活性化されます。単一の技術分野ではなく、分野横断的なオープンラボを立ち上げたことで、業際領域を刺激するようなブレイクスルー技術を生み出すことが期待されます。実験設備には、R&D総合センターの使われていない実験設備を一部有効利用しています。余っていたガラス器具や、古くなった遠心機などを融通していただいたことで、エコロジーにクリエイティブなオープンラボを立ち上げました。

展示スペース

⇒コワーキングスペースへ

KH i-Lab内には社内の技術を紹介する展示スペースがあります。来客時には、展示物を使って自社事業の説明をしていましたが、コロナの影響で、来客数が減少し、稼働率が低下していました。そこで、オープンラボの立ち上げに合わせて大きくレイアウトを変え、現在はコワーキングスペースとして運用しています。このスペースは、社内のメンバーに限らず、オープンラボで研究を行う社外のメンバーも使用しています。パーティションでエリアを区切っているため、ディスカッションにも、集中したいときのデスクワークにも使えます。また、コーヒーマーカーを導入したため、おいしいコーヒで気分をリフレッシュすることも可能です(もちろん個人負担です)。お茶をしながら社外の研究者と雑談すれば、脳が活性化してヒラメキが生まれるのではと期待しています。

新メンバー加入!

4月より新メンバーが増え、KH i-Labで業務にあたっています。知的財産室のメンバーと新入社員のメンバーです。

イノベ部の業務において、探索から具体化に向けたPoCへと移るテーマが出てきています。そのため社内にはない知見や技術が増えてきて、知的財産の取り扱いも難しくなっています。そこで、知的財産のプロフェッショナルであるメンバーが加わることで、スピーディに効率よくイノベーションを推進することができます。

一方で、新入社員のメンバーには固定観念にとらわれない、新人らしい斬新な視点を期待しています。

“室”から、“部”になり、ますますパワーアップしていくイノベ部で、社内外にイノベーションの風を起こせるよう、メンバー同頑張りしますのでご期待ください!



KH i-Lab内にあるコワーキングスペース。落ち着いた雰囲気です。

イノベ部メンバーに聞きました！ 復活の呼び声高いリサーチ案件トップ5

- ① 廃棄物の再利用（稲のもみ殻 など）
- ② 腸内フローラへのアプローチ
- ③ CNF（セルロースナノファイバー）の利用
- ④ 正浸透膜の開発
- ⑤ ハラル認証への対応

オープンラボを立ち上げて、いよいよ本格的に新規事業のPoCを進めているKH i-Labですが、そこには、数多くの“カタチにならなかった”（＝ペンディングになった）新規事業の種があります。それら事例を用いて、イノベ部がどのように活動を進めているか紹介します。

新規事業の作りかたとして、社会課題にアプローチする方法があります。将来的に問題になりそうなことに着目することで、先手を打った開発が可能です。例えば、①廃棄物の再利用（稲のもみ殻など）は、野焼きの規制が強まることで、もみ殻の処理が稲作農家の負担になるのではないかという仮説からスタートしました。外部へのヒアリング調査を通じて、もみ殻は意外と有効活用されているという結論に終わりましたが、顧客が明確で分かりやすいストーリーを描けます。

市場や技術のトレンドからアプローチすることもあります。②腸内フローラに関する検

討は、腸内環境をケアする製品が流行していることを意識したものです。調査を通じて、腸内に住む細菌が酪酸を分泌していることが分かり、社内技術との親和性がありそうなのが判明しています。また、③CNFの利用は、経済産業省などが推進しているプロジェクトであり、外部環境が推進の方向に向かっていることから、調査を実施しました。

個人の専門分野や興味からアイデアが生まれることもあります。④正浸透膜の開発は、元々の専門分野が電子材料であるメンバーが、社内技術で素材開発ができないか調査しました。⑤ハラル認証への対応は、イスラム文化への興味のあるメンバーが調査活動をおこない、化成品のハラル認証対応を検討しました。

さまざまな角度からアイデアを生み出し、調査活動によってカタチにすることで、新規事業化を目指しています。

～入社一年を経て～

相手の立場に立って考えるという基本的な業務の進めかたがありますが、実践できているようで大変難しいです。ところで、新規事業の創出には、技術の調査だけでは不十分で、さまざまな外的環境、内部要因を考慮すること（＝経営者目線）が必要です。経営者目線とは経営者の立場に立って考えるということ。一度初心に立ち返って、相手の立場を意識して業務を進めることで、新規事業の創出にも繋がります。

イノベ部での活動は良い意味で流動的であり、予想外のことが多かった。その中でも特に予想外であったことは、主体的にチャレンジする機会をいただいたことです。共同研究を通じた新規事業案の仮説検証やKH i-Labのオープンラボ立ち上げなど、とても貴重な経験ができました。今年は、新規事業案の魅力や市場性を明らかにするために、顧客や市場の潜在候補にプレゼンできる準備を整えたいと考えています。

新たな視点から、爽やか 柑橘系イノベーション！

当部員となってから4ヶ月が経ちますが、環境の変化を日々肌で感じます。特にイノベ部の業務では、実験知識だけでなく、さまざまなスキル（法務、経理、会話力など）が求められます。配属後は各スキルで「レベル0」を目指して、何事にも前向き且つ必死に取り組んでいます。「レベル0」とは、いつ何を誰にどんな協力を仰げばいいのか考えられること、つまり「全く知らない！ではない」と考えています。「レベル0」になって見えてくる新たな視点を取り入れて、イノベーション活動に繋がってほしいと考えています。

おしえてイノベ部

最近では耳にしない日はないと言っても過言ではない「DX」。DXとはデジタルトランスフォーメーションを意味する略語で、簡単に言えば「デジタル技術を使って変革を起こすこと」です。ペーパーレス推進や手作業を自動化することはデジタル技術の活用ではあってもDXとは言い切れません。デジタル技術を活用して、顧客に新たな価値を提供することができるようになったり、今まで難しかった部署間の連携ができるようになったりして初めてDXと言えるでしょう。さて、KHネオケムではどんな変革を起こすことができるのでしょうか。

📖イノベの書棚から

推し、燃ゆ
宇佐美りん（2020）、
河出書房新社
第164回芥川賞の作品。「推し」に捧げる主人公。今時の「推し」システムを全く知らないかたにでも、専門用語は呑み込むことができます。喘ぐような高校生活、理解してくれない家族、そして自分自身も判らない中で「推し」とどう向き合っていくのか。たとえ、共感や感情移入ができなかったとしても、現代に生きる「推し」の精神解剖という意味でも興味がある作品です。